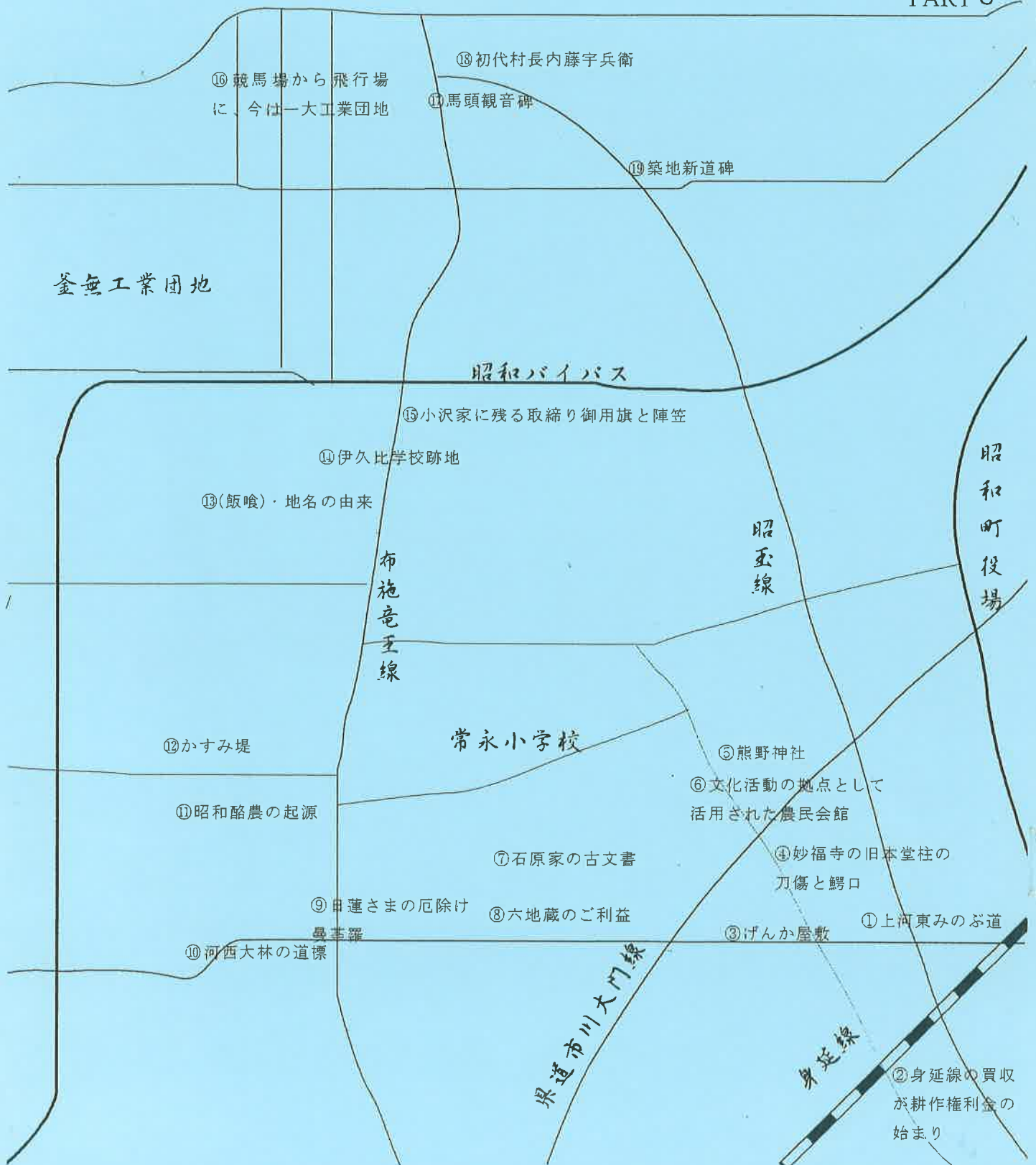


タイムスリップ路

〔常永地区編〕

PART 3



① 上河東みのぶ道

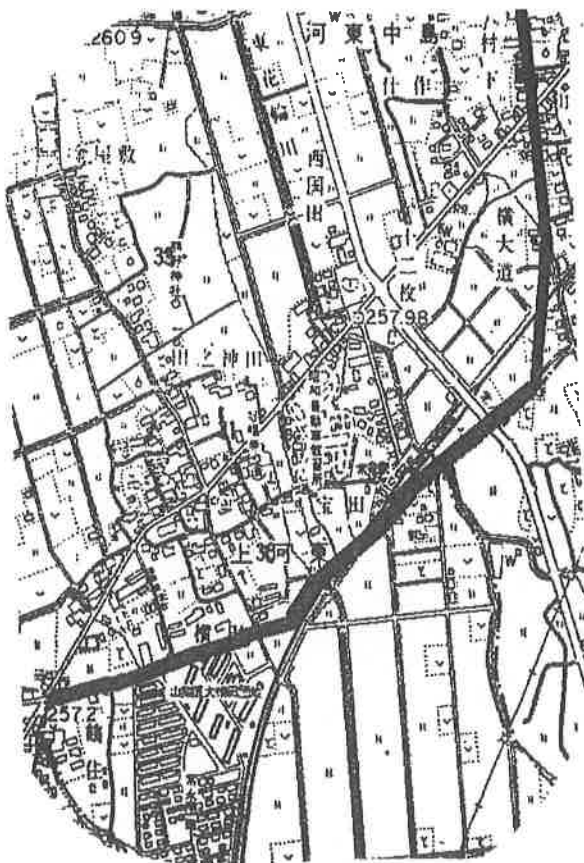
江戸時代「天明二年、文政三年、天保十四年」の古地図に、上河東村全図が明瞭に記されている。この古地図の中に、甲府往還、甲府より駿州までの往来の道としてみのぶ道が記されているし、上河東区を北より南に流れる、鉄橋のある大きな川を前川と記している。

近年になって圃場整備が実施され護岸工事も施工されたその時に東花輪川などと新しい名称がつけられているが、昔から前川、又は間川などと称されて今日に及んだ。

その前川の支流が常永駅のホームの下を北から南に玉穂町に流れている。この支流を河東中島との境界として西に進み、常永駅前を身延線の線路の南側に沿って前川の鉄橋の南側を並行して越えて、身延線の線路を横断して北側に出て常永団地の方向に進み、細田商店西の上河東河西の境界を流れる遠

藤川までが上河東分として、その西河西分を西に進み、田富町を南下するものと思考される。

昔日のみのぶ道は、前川の鉄橋の下手に人が通れるぐらゐの木橋が架してあったのを、時の土木がコンクリートの車も通れる橋に前川の川砂をあげて掛け直した。その後町で架け直しをし、巾六メートルという立派な永久橋となった。駅前のみのもぶ道も広い道幅となり、全部舗装されて昔をしのぶ由も無い。



② 身延線の買収が耕作権利金の始まり

不況下の昭和二年十一月八日、下河東の妙源寺で、地主総代会が開かれた。代表は武井幸作と井上与重。すでに市川大門駅まで開通していた富士身延鉄道を常永村に引き込むための用地売却の会議である。この席で、宝田の農地四反二畝十七歩〔四、二一七 平方メートル〕を一、八八五円六〇銭で売却することを決めた。田は特等が一反〔約一、〇〇〇平方メートル〕八五〇円で、ほかに小作者への補償金六九三円三二銭の支払いが決まった。この用地買収の際小作者に補償金として渡したのが耕作権利金の初まりで、これを機に小作者の権利が認められるようになったといわれている。

こうして昭和三年三月三〇日には常永村に西条常永駅が開業して、富士―甲府間の全線が開通。昭和六年四月には一部が西条村にかかる国母駅が開業、西条常永駅は昭和十三年現在の常永駅に改称した。



日光寺墓地にある五輪の塔

③ げんか屋敷

妙福寺の南一町ばかりの所に玄賀屋敷と呼ばれる三反歩ばかりの一廓がある。現在は畑になっているが古老の話によれば濠を濠し、今も往時を物語る古豪の一部をとどめている。

当所には郷主加藤氏の臣下の属する河東玄賀と称した豪族が居り、天正十一年武田奉行臼井三右衛門から二貫五百八十文の朱印を賜り、尚馬場美濃上守の名に於いても二貫九十文の朱印を拝領したと述べてあり、当時武田の臣であったことが思われる。この地は訛って「げんか屋敷」と呼んでいる。こうした豪族屋敷「垣内式住居」は隣村河西部落などでも二、三見受けられる。同類式のものである。耕作者の話によると数年前畑中に深い溝をつけようと堀割った時陶器類がたくさんと石燈籠の天蓋らしいものが出て、石は家に持ち帰り利用しているとの事であった。一町ほど離れた妙福寺墓地北隅に五輪塔一基が文字磨滅して残されてある。編者は戦国時代のもので、河東玄賀当時のものと推定する。玄賀屋敷の西隅にはつい最近まで「蛇塚」と呼ばれる塚があつて、雑草が繁茂していた。この蛇塚について口碑によれば、玄賀に妾があり常に本妻との間の折り合いが悪く、妖暴な妾は本妻を世に亡き者にせよとのたくらみから本妻の寝所にたくさん蛇を襲わせ、蛇によつてこれを締殺させ野望をとげたと言う、この本妻の塋所である塚を誰いうとなく蛇塚と呼ぶようになったと

伝えられている。

説はさて置き、妙福寺のある五輪塔より約二百年余りも古いと思われるものが廃寺日光寺の墓地にたくさんあり、その中の一基は旗頭級の武将のものであることはたしかであるが、やはり文字がないので加藤一族のものか、玄賀先代のものか解明されていない。また、玉穂町歆盛院の薬師如来「国重要文化財」が日光寺から運ばれたと言う一説もある。

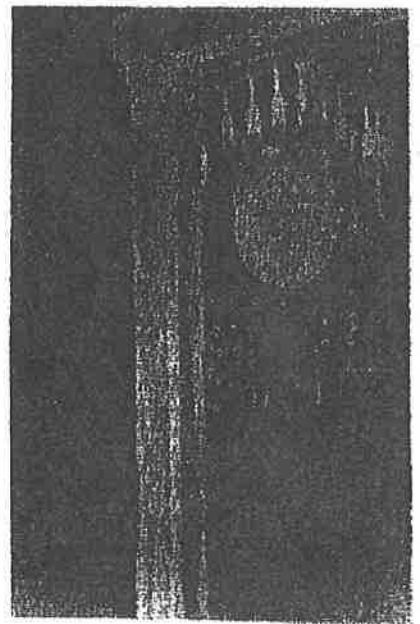
④ 妙福寺の旧本堂柱の刀傷と鰐口

この寺はかつて海蔵寺と号する真言密教の古刹であつたが、延慶年間「二二〇八—二二一〇年」時の住持常明法印が、日蓮上人の上足日向と法を論じた結果、法華經の妙理に屈伏、帰依改宗して日妙の名を賜り、当妙福寺の開創となつた。

昭和改築前の本堂は密教時代の護摩堂といわれ、改宗第八世日心の永正年間「一五〇四—一五二〇年」に大改修を行い、

その後も数度加修してきたが、惜しくも昭和三四年の七号台風によって倒壊、わずか一葉の写真と数点の古材がその名残りとどめるだけとなった。この古材の柱面からすると鎌倉時代から室町初頭の建築物ではないかと推測されている。

又、この柱には刀痕あとがあるが、これは、江戸城攻略に向かう有栖川の官下の一隊が東海道から本隊と分かれ南部口から身延、鰍沢、南湖等を繋ぐ駿州往還を北上して甲府城へと向かった時、たまたま当寺前を通過にあたり、幕軍が潜伏しているのでは無いかと疑い、寺内に入り物色する傍ら、軍刀を持って本堂の支柱数ヶ所に切りつけ官軍の威勢を示し、僧侶および群集を恐喝した。郷民は、一時ろうばいしたが、やがて良案を考え村内から酒や米を集め、婦女子を集めて官軍を歓待した。彼等は大いに悦に入り、ここを中食所として大憩した。村人の饗応を満喫した余り鰍口「金鼓」を置き忘れて去ったもので、今なお当寺の宝物として大切に保管してある。



刀痕と金鼓

鰍口

鰍口は古くから寺の軒下などに懸け、参詣にあたって、それを吊り下げた紐で打ち鳴らすことが行われてきた。

本町にある鰍口は、甲州巨摩郡河内一山郷新谷寺公用奉寄附鰍口也、干時天文二年乙未（一五三三）春正月吉日、大旦那源信友天狗沢大工大願主泉正坊と彫られている。町で唯一の県指定文化財の指定を受けている。

⑤ 熊野神社

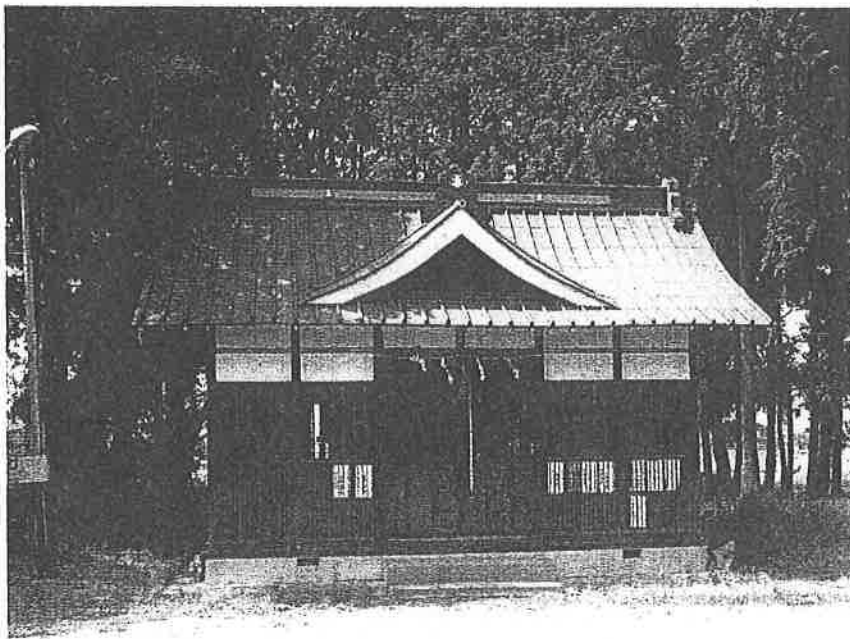
この神社の境内の広さは四六五坪。三人の神様、伊弉冊命〔いざなぎの命〕、速玉男命〔はやたまおの命〕、事解男命〔ことわかおの命〕が祀っております。

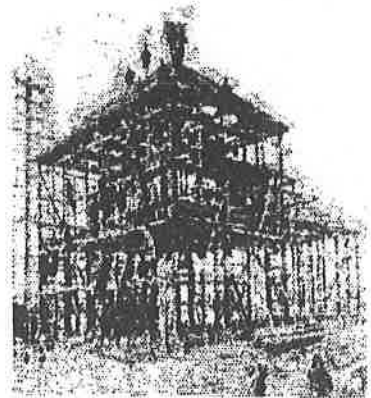
今から六百余年前、甲斐源氏の臣、加藤兵ヱ景正の産神〔うぶすな神〕、屋敷神で、代々住んでいたところで、この辺一帯を加藤の郷と称し、上河東、下河東、町田、井の口、河東中島、飯喰、築地、玉川など八カ村の総元締めの神社で、祭りのときはお神輿をねって八カ村を回り、下河東の神社で昼飯を食べ回りながら帰村した。

加藤の郷八カ村については、昔から拝殿にあった寄付板に文久二年拝殿の修理の時に各部落から寄付金をしたのでその部落名が記してありました。昭和四九年春拝殿改築の折、伝統と歴史のある神輿を町に保管を依頼してあります。

昔日は鬱蒼たる古木のため、昼なお暗いという荘厳の森だったが、昭和三四年の台風のため数百年を経た杉の御神木も

根こぎとなって倒伏し、他の大木も折れたり倒れたりした。その後補植をして今日の若木の森となる。





農 民 会 館 上 棟

⑥ 文化活動の拠点として 活用された農民会館

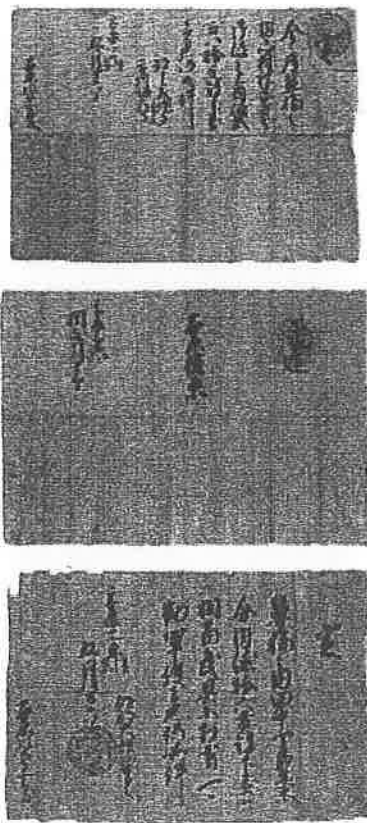
常永農民組合は、地主に対して小作料の引き下げ運動を行うとともに、自己の経済力の蓄積を計るためや、文化活動を行うため農民会館を建設した。資金は地主から割り引かれた納め糶の一割を出し合い、敷地は河西と上河東との中間の往還沿い北側を選び、建物は甲府市立商業学校の本館を払い下げ、横七間、縦五間、げや二五尺、木造二回建瓦葺で、二間に五間半の換気窓も備えてあり、それに大木機械工場、横七

間、縦十軒も買い受け、両棟接続して建築したので、建坪九十五坪の壮大なものであった。この工事は昭和二年上棟式を行い、その冬開館式が盛大に行われた。その経費一万五千元と労力六〇〇人の奉仕を要したので、予定した資金では若干の不足があり、当時の幹部がお互いに換金して決算をつけるほどの熱意を持っていた。開館式が済むと、所期の目的に沿ってここが頼りに活用されることになり、まず文化活動のセンターとして、映画館や演劇など催され、めぐまれぬ農村に気軽に安価に楽しく見られるので、大いに利用された。また農民の最も負担の重い結婚式の簡素化により、費用の節減を計るため、組合式結婚を奨励し、この農民会館で組合員が会費持ち寄りで何組かの挙式を行ったが、一般の自覚不足のため数年にしてその後実行されなくなった。後、葬式においても、同様式の簡素化を計るなどを実行した。組合幹部伊藤周平、今沢紋次郎等は組合葬で送葬された。

せっかく軌道に乗った会館の利用も一般の自覚不足と、農民会館の低調化とともに会館は廃止された。しかし今日でもその流れから地区によつては簡素化が行われている。

⑦ 石原家の古文書

武田信玄は家督をついだ直後の天文十一年（一五四二）から、いわゆる竜朱印状をもって政策の浸透を図った。個別に発行されたこれらの文章はそのまま先例となり、竜朱印状のもつ重みは絶対的なものとなっていった。武田氏領国全域では二千余りのものが残っており、河西の石原家には三通が保存されている。一通は官途状と言って、石原氏に対して「権丞」という位をあたえたものであつて、何かの褒章として名



譽を与えたものである。あとの二通も信玄が石原次郎三郎に与えたもので二通ともほぼ同じようなことを申し渡したものであるが、一通は「田中四郎兵衛分の内徳十六貫」を、もう一通も「山村神兵衛尉分の内徳二八〇文」を石原氏に与えるというもので、内徳とは増分ともいって、従来の検地高より増加した分である。つまり石原氏が何か軍功をあげたので、その褒賞として従来を知行地の外に加恩されたものである。ちようどこの年、信玄は正月に駿東郡の深沢城を攻略し、三月には遠江の高天神城を攻め、四月には、三河足助城を攻略しているの、そうした戦陣での軍功であつたと思われる。いずれにしても石原氏がこの時点で、鼻輪郷で合わせて十六貫を加増されたことは重要なことであり、本貫地である河西での地行高ははつきりしないが、これに倍するものがあつたと推定され、石原氏が河西を代表する地侍であつたことが明らかである。天正十年（一五八二）の武田氏滅亡後に、旧武田氏家臣団が徳川家康に忠誠を尽くすために提出した起請文によれば、石原次郎三郎守親は跡部九郎右衛衆の中に編されており、徳川氏に臣従したことが明らかである。

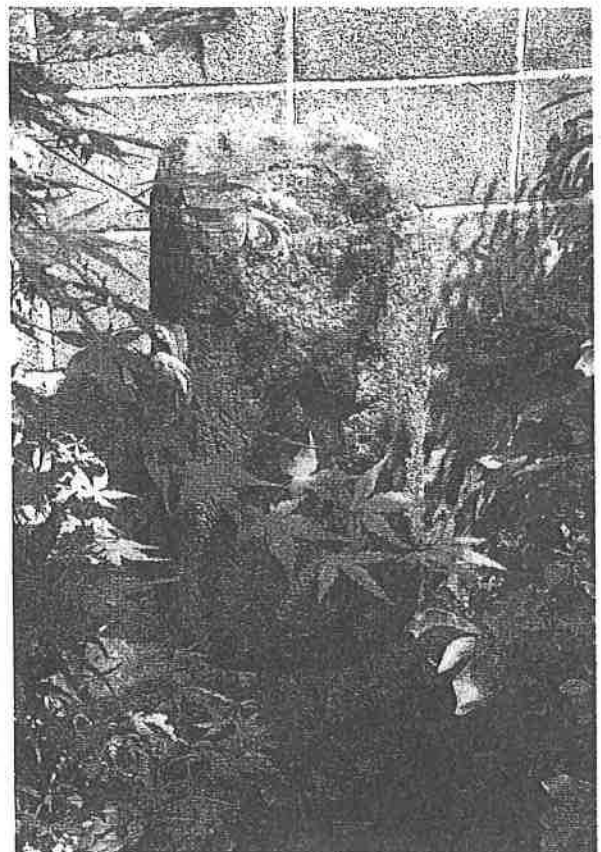
⑧ 六地藏のご利益

むかしむかしのお話です。

大雨が降り続くと、釜無川があふれて、田や畑が流されました。お百姓さんが一生懸命耕して稲を植え、穂が稔った頃、台風がきて大水になり、田んぼが流され、あとは、石ころだらけの川原になってしまいうのです。

ある日のこと、貧しい百姓夫婦がいつものように、石ころだらけの田んぼを耕していると、鍬の先に何やら大きな石があたったので、よくみると、それは六角の細長い石の、六角に彫られた六地藏さんでした。

百姓夫婦は、はっとひざまずいて思わず合掌しました。「これは―大水のとき、上流の玉川村の方から流されてきたものに違いない。どこかのお寺さんの山門脇にでもあったものではないか、すぐお返ししなければ」と二人はその日から六地藏さんを新しい菰にくるんで、大八車に乗せて川の上流で



ある、玉川村や、八幡村のお寺さんを毎日毎日、足を棒にして訪ね歩きました。が、でもどこのお寺さんにも、ちゃんと山門脇に六地藏さんがいて、いなくなったところはありませんでした。

途方にくれた百姓夫婦は、相談をして、「もうこれ以上探すことは無理だから、うちの田んぼへお祭りしようじゃないか」ということになり、六地藏さんを掘り出した田んぼの隅に、大きな石を運んできて、そのうえに六地藏さんに乗せて、二

人はいっしょうけんめいにお祈りをしました。

「南無お地蔵さん、こんなにつくい田んぼの端で申し訳ねえけど、わしらがしつかりおまつりするから、どうか、この田んぼでうんと米がとれるようおたのもうします」と、お祈りしました。

次の秋も、また大水が出て田んぼを流しましたが、何故か、この百姓夫婦の田んぼだけは、大水が避けて流れましたので、この年はお米が沢山とれました。百姓夫婦は、「これは六地蔵さんのおかげだ。有り難いことだ。ありがたいことだ」と、涙を流して喜びました。そして、その年とれた最初のお米を、六地蔵さんにお供えしてお礼を言いました。

こうして百姓夫婦は、六地蔵さんのおかげを受けて一生懸命に働いたので、幸せな生活を送ることが出来ました。

この話がいつの間にか村中に知れ渡り、誰というもなく、この田んぼを「地蔵つ田」と呼ぶようになりました。

いまでも、河西の村ひがしにこの田んぼがありますが、六角石の頭部が欠けてしまった六地蔵さんは、田んぼの所有者の手で大切に保管されています。



⑨ 日蓮さまの厄除け曼荼羅

もう三百年も昔のお話だそうです。

河西村の法界寺というお寺に、たいへん親思いの住職と、年老いた母親が仲良く暮らしていました。

ところがある日突然、母親が原因不明の重い病気にかかり、床に臥せってしまいました。住職の必死の看病にもかかわらず、日ごとに悪化して、医者からも見放されて死を待つばかりでした。

ある夜のことでした。住職は看病疲れで、病人の枕元で深い眠りに落ちてしまいました。それでも夢のなかで、「母親の病気が治りますように」と、日蓮さまに一心込めて祈っておりまして。すると、白髪のお僧が現のようにはつきりしたお姿で現れ「住職、おまえの、母を思うやさしい心根には感服した。日蓮さまがお書きになった、有り難いお曼荼羅が「東村」の土蔵の中にある。このお曼荼羅を本堂にお迎えして、母親の病氣平癒の御祈願をするがよい」とお告げになると、お姿は消えてしまいました。

住職は半信半疑でしたが、翌朝、早々「東村」に行き、その話をしますと、白髪の老僧の申された通り、土蔵の中に日蓮さまのお曼荼羅がありました。

住職は早速本堂にお迎えし、朝夕、一心に病氣平癒の御祈願をしましたところ、不思議なことに、母親の病氣は日に日

に快方に向かい、何日か経つと、すっかり元通りの元気な体になりました。

そしてあくる年の夏は、近年にない猛暑が続きましたが、母親はビクともしませんでした。が、その暑さのためか、母親が侵されたときと同じように、原因不明の悪病が村中にはびこりました。村人たちは驚き、色いろの手立てをしましたが一向に病人が減る気配はありませんでした。

住職はこの様子を聞くや、すぐ、母親の病氣と同じように日蓮さまのお曼荼羅を本堂にお迎えし、村人たちを集めて連日連夜、一心にお題目を唱えて病氣平癒の御祈願をしました。

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經」の合唱が本堂内に満ち溢れ、その轟きが日毎、病人を快方に向かわせ、お盆を迎えるころにはすっかり元気になり、村も明るさをとりもどしました。

村人たちは大変よろこびました。この靈驗あらたかな日蓮さまのお曼荼羅を、誰いうともなく、「お村の宝、日蓮さまの厄除けお曼荼羅」と呼ぶようになり、それ以来、毎年お盆の十六日には、この尊い曼荼羅を法界寺にお迎えし、お礼題目

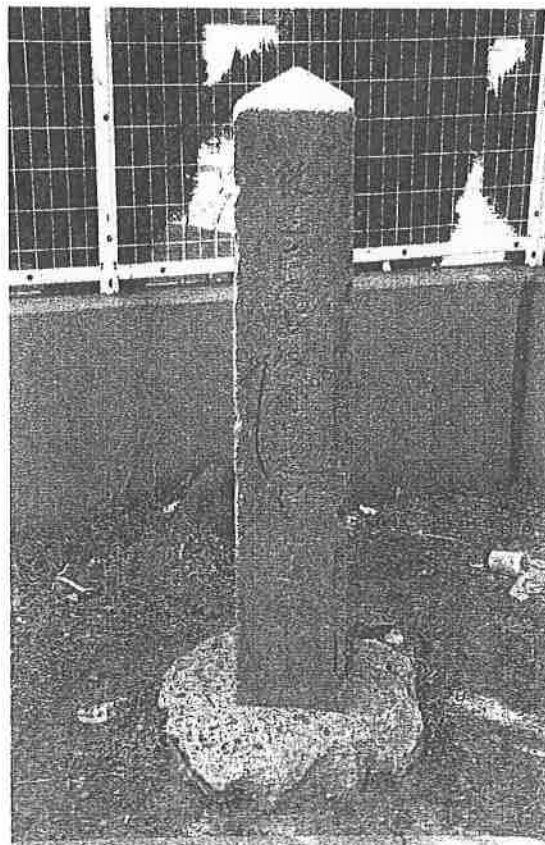
をあげることになりました。

その後、この厄除け曼荼羅は、「お北」の土蔵に大切にしまわれるようになりました。そしてこの噂は次第に近郷近在に広がり、八月十六日の、年一回の厄除け曼荼羅の開帳日には、それこそ、押すな押すなの大勢の参拝者で賑わいました。

なお、この行事は、今も連綿とつづいております。

⑩ 河西大林の道標

道標、道しるべは、旅する人の安全、便利のため考えたもので、路傍に立てられ先方の方向を示している。法界寺先の道端に大正七年の道標が立てられているが、若草の長遠寺や櫛形の高尾山参詣者の案内のために建てられたものだと思う。

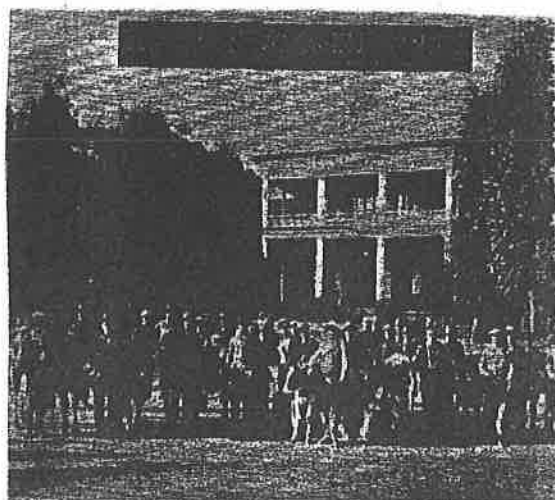


正面に從是西鏡中条村日蓮宗長遠寺拾八丁

右側に右高尾山に二里、小笠原村に廿六丁、

左側に大正七年建発起人

角柱の幅二十四センチメートル、高さ一メートル十三センチメートルの花崗岩製である。



西桑村外ヶ村組合農会第一回乳牛購入（旧県庁舎前にて）

⑪ 昭和酪農の起源

大正十五年杉浦村長の時代には、農会費として地租一円につき金三十銭の割合で費用を徴収したが、当時農会は余り事

業をしていなかったため、たくさんのお金が余ったため、県の斡旋を願い北海道から乳牛を買い飼育してみたらどうかという動議を営業上経験深い時の村会議員臼井治郎が提案し、役員会の決議を経て実行することになった。当時は今より物価が安かったため、北海道産の牝子牛でも二百円位で購入でき、村農会の方からこれに対して百二十円の補助金を出すことにし、村内農家に一応呼びかけて希望者を募った。しかし酪農に経験のないこの地方の農家では耳を傾けるものがいたって少なく、部落でも一寸新しいことを好むといった顔ぶれがこれに応じただけで、一般に希望者が少なかった。

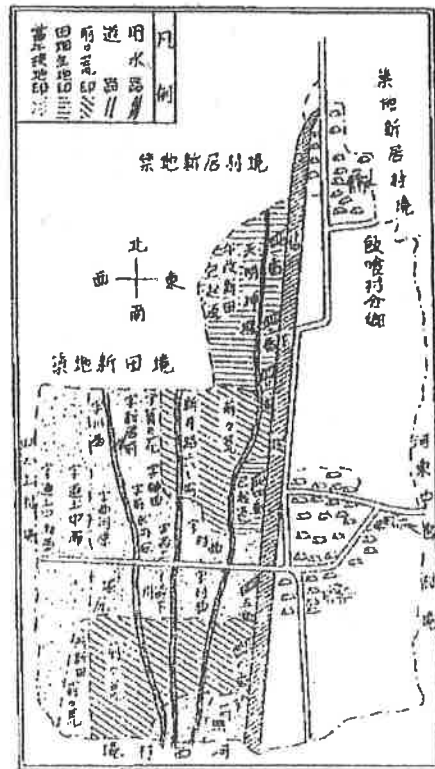
しかし若干の希望者が得られたので臼井治郎、三井政義、河口智雲の三名で北海道石狩地方へ出かけ、優秀なものを買ひ、羽越本線を経て新潟まで来た時、二十三日午前十時に甲府駅につくというのを電報で県農会に知らせた。甲府駅につくと、時の知事三辺長治が貨物ホームに出迎えたほど、当時として一大事であつたらしい。それから県庁舎前で県役員達にもお目につけ、知事からも激励の言葉をいただいたとのことである。これが我が昭和村での酪農の始めである。

⑫ かすみ堤

釜無川と笛吹川の合流地の三角地帯に位置する我が昭和町は、雨が降れば一面の湖と化し、晴天が続けば葦や水草の茂る水溜りと湿原となる。信玄堤〔かすみ堤〕の一連の治水事業により、人々が生活するようになったのは、盆地でも一番遅かったのではないかとその地勢でも思推できる。

明治三年の飯喰の検地絵図によると、一番堤から6番堤まで、本堤の内側に川に向かって一定の間隔でおよそ二十軒の堤防が突き出ている。これは堤防へ打ち寄せる本流を河中へはじき返すことと堤防を守る目的手段で、更に一旦戻った流れが次に堤防へ寄せて来る距離を的確にとらえて次の突出堤で次々と本流をおし戻して下流へやる。しかも、その突出堤の終わりあたりから次第に川幅を狭め臼井沼〔現在のリバーサイドタウン〕へ注ぐようになっていた。

巨摩郡飯喰村検地絵図 明治三年九月



飯喰村検地絵図

明治四十年の洪水以来この堤防を越えた洪水はないが、大正期になってもトロツコを用いて南端部を延長しているし、第二次世界大戦中飛行機の誘導路を作るため一部削平されているが、その必要性が認識され戦後再構築されている。洪水に決壊されながらも信玄堤も長い歴史と努力の末現在にいたっている。



⑬
〔飯喰〕・地名の由来

むかしむかし、国中を流れる “かまなしがわ” という川があり、大雨のたびにこの川が氾濫し、付近のお百姓が丹

精込めた田畑を何時も流してしまいました。

当時、国中を治めていた計左衛門は、いたくお百姓の苦痛を思い、かまなし川の両側に、土手を作ることを思い立ちました。そして計左衛門は近所の百姓を集め、相談をしました。

百姓たちは、「そりゃあ大仕事であるので、とても近所の衆ばかりでは無理だから、広い範囲から人足を集めたら如何なものでしょう」と言うことで、計左衛門は、手の届く範囲から人足を集めました。

集まった普請人足は口ぐちに、「俺んちでも、“かまなし川の被害を受けた”と言ひ合い、仕事に協力してくれました。毎日の普請はきつかったが、お昼の弁当どきともなると、モッコ担ぎの相棒や、石積み仲間と車座で弁当を開き、世間ばなしに花を咲かせながら麦飯を喉に通す。すると、自然に安らぎと親近感が湧いてきました。

日が経って来たら、誰というもなく、「一ヶ所で、女衆にお茶でも入れてもらって、熱いお茶でも飲むじゃあねえかい」と。

そんな言いふらしが元で、人足用の大きな飯場が出来まし

た。

それからです。時のお代官様が築堤工事を視察に来られましたのは。

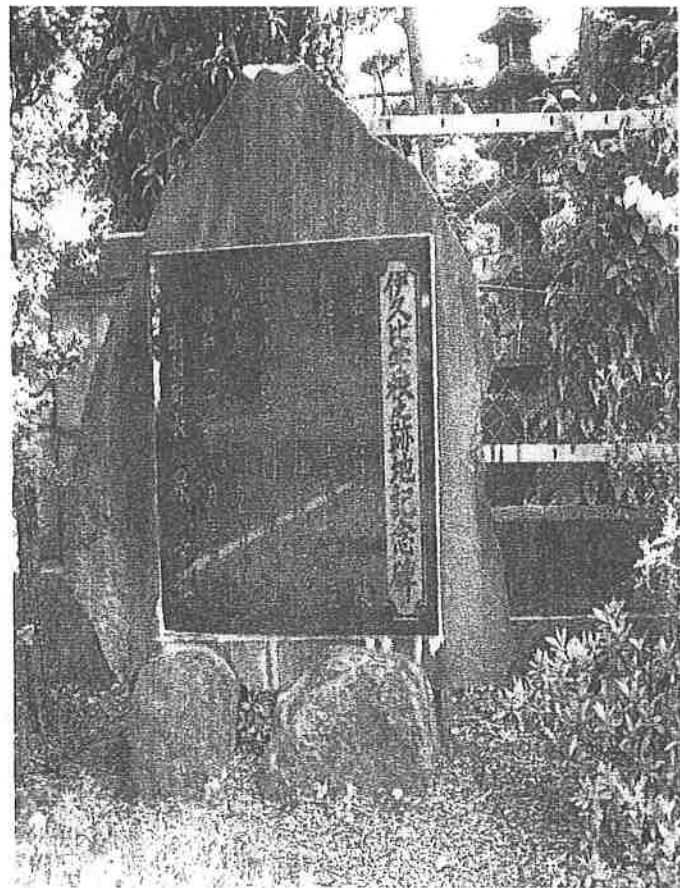
お代官様は、川に流された田畑が一望の河原に変わったのに驚き、「これじゃあ、何処がどうだか、分からんではないか」と言い、

「字が分からんでは、これから先たいへん不便だ。

どうだ、皆が食事をした所ということで『飯喰』と名付けたら」

と、人足の労をねぎらう意味の地名にしてくれました。ところが、ちよつと離れた土地の人達が、「めしうい」に行けば喰いっぱぐれがないところだ」という間違った解釈をしたらしく、押すな押すなの盛況で移り住むようになり、村はだんだん栄えるようになりました。

その後、時代が変わり、子供や孫の代になったら「いいくい」と誰もが呼び合うようになり、更に時代が進み、現在の『いっくい』と呼ぶようになったということです。



⑭ 伊久比学校跡地

明治維新によって古い封建社会が崩壊し、厳しい身分制度が撤廃され、鎖国は一転して欧米文物の輸入に大童をなした。この画期的な変革を成し遂げるために、明治政府は国家統

轄のもとに学校教育の普及に努力し、整然とした中央集権主義をとり、国の事務として府県知事、市町村長に委託され、重要事項はすべて国自ら決定することにした。

当時の学制によれば全国を八大学区、一つの大学区を三十二中学区に、一中学区を、二百十の小学区に分ち、区内の六歳以上の男女を、小学校に収容することにした。

こうして、当村でも明治五年九月六日に伊久比学校が、中巨摩第二区として開校し、飯喰、築地新居、河西、上河東を通学区とし、学区取締りには、小沢得一が任じ小沢織右衛門方に学校が置かれた。

⑮ 小沢家に残る取り締まり御用旗と陣笠

天下を独占した徳川家康は、親藩制をとり、統治困難な甲州を直領とし統治していった。寛文元年「二六六一年」には、はじめて石和に陣屋をおき代官を配置、後には甲府に市川に

また谷村にも出張所を設け治政を行っていった。

代官所の仕事は専ら幕府の勘定奉行等の指揮を受け、郡村の戸籍調査、租税徴収、訟獄及び逮捕などの事務を掌り代官の下に手付・手代書役を置いた。この他郡中総代というものを置いて、常に陣屋に伺い、代官の命令を各村の名主に伝え、郡中の人民訴訟を弁護仲裁したり、警備を監査し、年貢米の運送事務を掌った。

小沢家は飯喰の名主として、村の治安維持に努めたが、その当時使用した御旗と陣笠が今も家宝として大切に保管されている。現今の町村長のような役目で今の町村長よりも更に権限が広く、警察、登記所、郵便局、税務などの仕事も担当した。



御旗と陣笠（小沢家蔵）

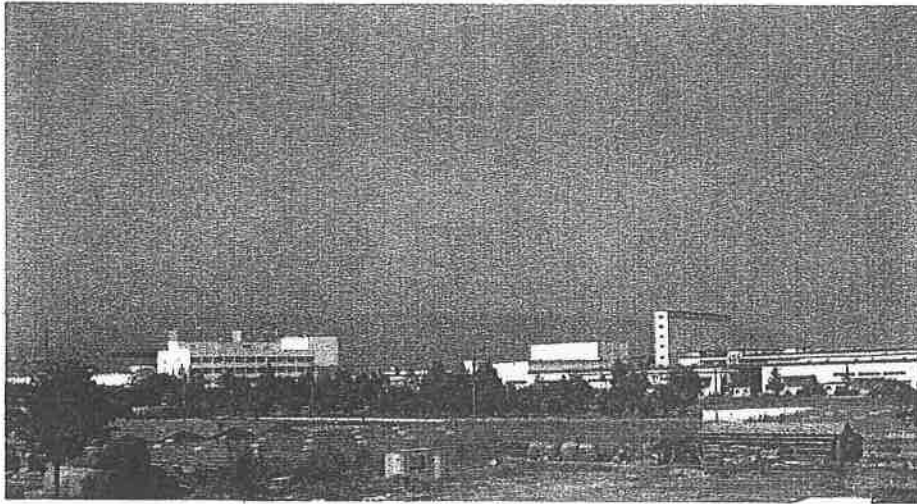
⑬ 競馬場から飛行場に

今は一大工業団地

釜無川の本堤内に洪水がおさまり続けて百年近くになるが、いつか本堤を越えてくる—そんな警戒心もあつて長いこと築地河原は放置された荒蕪地であつた。その間広大な敷地を利用し玉幡よりで草競馬が開かれた位だったが、戦時色が強くなり出して、ようやく広大な空地は食糧増産の掛け声とともに開拓らしい開拓が始まり、築地ばかりでなく、今諏訪西方面からも川を越えて来て、盆地の真ん中にランプの部落などと紹介されたりした。作業中寝泊りする小屋は三〇戸を下らなかつたろう。そんな中で玉幡寄りのボロ電南一帯に、千塚町出身の梅沢義三氏が民間飛行場を造成し、細々と航空機に情熱を傾けていたのだつたが、大陸の戦線長期化や渡洋爆撃など空軍人気の上昇する中で、どういった経過でか熊谷学校

分校が釜無河原へ建設されることになった。当時の軍の圧力は絶対的なもので、現在の日立工場、農林高校から釜無工業団地一帯が接収されてしまった。そして砂ぼこりを押えるために竜王の赤坂から粘土質の強い赤土が運ばれ、たちまちにして広大な河原に三〇四十センチの厚さに敷きつめられ、太平洋戦争末期に至るまでいわゆる赤とんぼが盆地の空を二十、三十機と舞い、騒音で鶏が卵を産まなくなったり、練習機を空襲から隠すため付近の部落へ誘導路が作られたりした。また、その下流のリバーサイドや流通団地方面へ立川飛行機製作工場も進出してきたが、これは一機の完成も見ぬまま終戦となつてしまった。敗戦とともに広漠たる築地河原に戻つてしまつた河原—然し敗戦の食糧危機の国民はこれを見捨ててはおかなかつた。接収条項「取り交わしの契約文章」の中に文章のアクセサリ—としか考えていなかったが、軍が不要となつた際は元の耕作者に返すという一項があつたのである。その一項の契約書の中で息を吹き返したのである。彼らはそこに夢やロマンをこめた農業、農家の姿を求めて、自分達の手に戻つた広大な築地河原に立ち向かつた。ブルドーザーもな

い全くの人手労働でみるみる理想の地となり、米、麦、果樹、蔬菜あらゆる作物が可能となり、本田を追い抜く勢いを誇示したのだった。



しかし、朝鮮動乱を契期とした日本の産業、経済の復興、その後の神武・岩戸景気の波は第一次産業の農業を後進性のある職業として見返るものもない産業に変えてしまった。

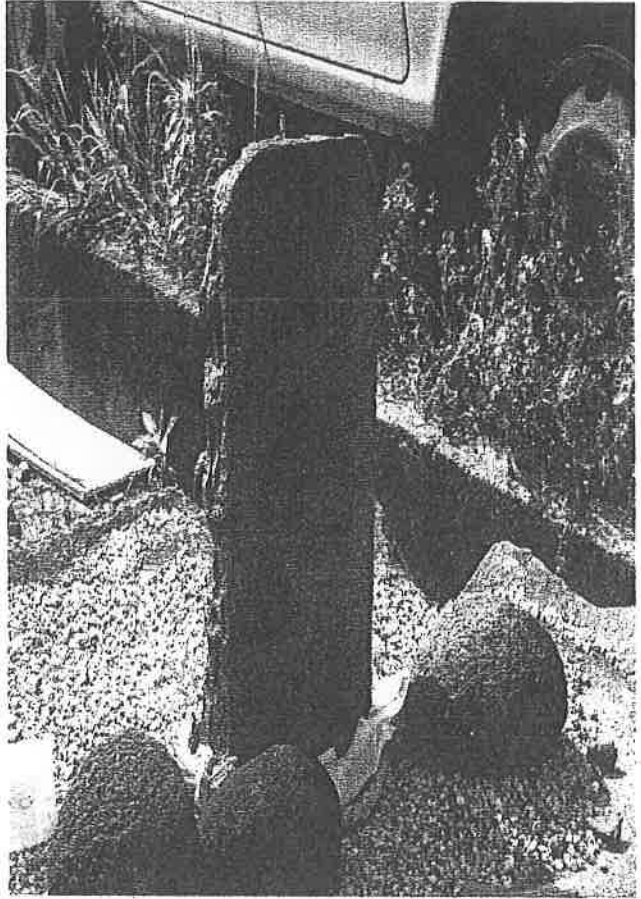
日本列島改造論をはじめとする国の施策の波がまたまた築地河原へ押し寄せたのである。国母に次ぐ工業団地として、二十六ヘクタールが約三十億の投資によって工業団地として県に買収された。買収は国から耕作者に一旦払い下げられた上で県が買収した。一反三八〇円で国から払い下げられ、県は反四〇〇万円で買い取った。その以上価格差こそは開拓精神、開拓努力に努めた農民の血と汗に対する報酬というべきか。

さて、開拓地の人々が立ち退いて企業の入居を待つばかりとなったとき、今度は例のオイルショックによって日本ばかりでなく世界が不況のどん底に低迷した。およそ十年かかって日本はそのショックから脱出したといわれているが、築地河原も元の草原に戻って入居企業は零だった。その十年間に築地河原には二つの蜃気楼現象が起こった。山梨医科大学と国体会場である。二つとも誘致合戦の末、玉穂と小瀬に落ち

ついたのはご承知の通りだが、県はこのとき工業団地という使用目的を変更することによって、三十億の投資資金を医大や国体会場資金に肩代わりさせようとした。これに首を縦に振らなかったのが我が昭和町の時の行政選択だったのである。そして医大は玉穂へ、国体会場は小瀬へと県の三十億投資はそのまま実現した。然し我が昭和町はこれで県へ迷惑をかけたのでは決してなかった。オイルショックから立ち直った日本の企業がたちまちに最初の目的通りに進出してきて現在の優良工業団地として埋め尽くしてしまったからである。中央高速道、昭和バイパスと交通の便のよいこと、国体会場は富士のよく見えるところというキャッチフレーズにふさわしい会場という県の希望どおりにはならなかったが、そこに国母とともに交付税不交付町村としての巨大な財源となった釜無工業団地が実現したのである。

⑪ 馬頭観音碑

観世音は現世利益を与える菩薩であり、場所に応じ時に応じて、人間の危機に際して三十三身に変化して民衆を救済するということで信仰が深い。三十三の変化観音のうち、中心になるのは六観音であるが、そのうちの一つに馬頭観音がある。つばめ寿司前の道端に一体の馬頭観音がある。中央に馬頭観音の文字の刻印があり、右側には右甲府道、左鰯沢道、あき女建とある。この碑は道標を兼ね「あき」という女性が建てたのは何か理由があったのだろう。以前は旧道田富竜王線にあったものを、道路改修の折現在地に移した。



⑱ 初代村長内藤宇兵衛

明治七年から八年にかけて明治新政府は近代化の促進を図る施策のひとつとして小村の合併を強行し、県内に八百余り

あった村を三百あまりに統合した。

明治七年八月には西条・西条新田・清水新居が合併して西条村となり、その年の十月には河東中島・押越・紙漉阿原が合併して押原村となり、翌八年一月には築地新居・築地新田・飯喰・河西・上河東が合併して常永村となった。

ここで十一町村は三カ村となったのであるが、さらに明治二十二年には町村制施行に伴って西条村と押原村が合併してさらに大きな西条村が誕生し、その年の七月には常永村と組合村を結んで西条ほか一カ村組合村となる。

このときの初代組合長に内藤宇兵衛が選挙の末就任する。当時の村長には大地主、家柄、ということがまず考えられ、村長級の条件を具備する者は大体定まっていた。

このように大地主の家に育ち、名望家として築地新居村戸長から常永村戸長、西条村ほか一カ村組合長を歴任した宇兵衛は、明治三十七年六月の選挙で貴族院多額納税者議員に当選する。また、弟の啓吉も中学校教諭をした後、平等村〔山梨市〕の根津一秀家に婿入り。明治四十四年に山梨県会議員となった後、根津啓吉として大正十年、貴族院議員となり、

ここに兄弟貴族院議員が誕生する。今も当時のままの屋敷は現存するが、他の人の手に移り内藤家からは離れてしまっている。

⑬ 築地新道碑

昭和三年富士身延線が開通する前の路線工事に、築地新居の河原の土砂が利用された。河原から築地の部落を通って中島の宿を縦貫、市川大門線を横切って現在の身延線の土盛りの上面に使われた。玉砂利と白砂利ばかりの洪水の堆積物は格好の材料だった。トロツコの鉄路を敷いた上を鍋トロを二十位引つ張って昼夜を通して運び出された。工事が終わってからこの路は残されて中島と築地をつなぐ新道となり築地部落の入り口に現在もその記念碑が建っている。

この路線工事に北陸方面から大勢の労務者が入り込み、あの越中おわら節を洩い声で歌った。久しく昭和の名物だった笠踊りはこの人達が残して行った踊りである。

